

もろき こういち
諸木 浩一

徳田脳神経外科病院長（鹿屋市）



【プロフィール】

出身は曾於郡大崎町です。中学1年生まで大崎町で過ごし、中学2年生から鹿児島市の清水中学校、鶴丸高校、そして熊本大学へ進学しました。ちょうど受験の時期に新たな医大が増設されたので、医学部に目標を定めました。

専門は脳神経外科です。大学に入り剣道部へ入部しましたが、そこに10年ぐらい上の先生が脳外科医になっておられ、高校の先輩でもあり、そのまま先輩の後ろを追う形で進みました。

卒業後は熊本大学脳神経外科に入局し、医局の派遣で宮崎県延岡市や大分県別府市、あとは熊本市内に10年程勤務しました。その後、平成3年から鹿児島市立病院勤務、平成13年に徳田脳神経外科病院へ就職しました。

こちらへ就職したきっかけは、開設者である理事長が熊本大学脳神経外科の先輩であったことや、ちょうどその時期に母親が亡くなり、大崎町の実家に親父が一人になったこと、また、そのときの鹿児島大学教授の勧めもあり平成13年に副院長として着任、平成19年より院長へ就任しました。

【日頃の思い】

いろいろな開業医の先生方と連携をしながら紹介していただき、場合によっては逆紹介して、少しでも脳疾患に関する中心的役割が担えればと思い、今までやってきています。

当院開院前は、ほとんどの脳疾患患者さんが鹿児島市に搬送されていました。昭和60年の開院以来、住み慣れた地域で専門的な治療を受けられるようになり、多くの患者さんが来院されるようになりました。その後もいろいろ施設が出来ましたが、ある程度中心的な役割を当院が担ってきて、それを今後いかに継続していこうかと思っています。

この地域ならではの大変さというと、やはり鹿児島市内と違って総合病院が無いことです。中核病院としては大隅鹿

屋病院や鹿屋医療センターもありますが、第3次救急医療を担う病院がありません。我々の病院は脳神経外科単科の病院なので、やはり様々な疾患や合併症等は、その他の診療科を持っておられる病院施設と協働できればと思っています。

この地域の良さというと、医療機関の数はそれほど多くないので、他の病院やクリニックの先生方とも顔見知りということがありますね。

赴任当初、地域住民の方への啓発という意味合いで地域講座を企画し、それによって少しでも疾患の啓発と患者さんの掘り起こしにより、早期の受診が可能となりました。

それと、最近では国がすすめる地域連携を積極的に推進しています。また、脳卒中市民講座の開催など少しでも貢献できているのではと思います。

このような取り組みが必要と思ったきっかけは、住民の方々にも医師の顔を知ってもらって、それぞれの病院の役割を把握してもらわないといけないと思っています。どの先生がどのような診察をされているかを知り、安心してもらうのが一番大切だと思います。

【医師の確保について】

マンパワーが不足しているのは間違いないので、それぞれの持っている能力が少しでも重なり合い、どこにも無理をさせないということをしてそれぞれの先生方も考えていただければ連携ができやすいのではと思います。ただ患者様の交通手段が少ない地域ですので、必要な時には専門病院に紹介してもらい、そうでない軽い症状の場合はかかりつけの先生方が的確に判断し紹介して頂くというシステムづくりが必要だと思います。

開業の先生たちも少しずつ平均年齢が上がってきているので、その次の世代がどれぐらい帰ってきてもらえるのかというのが、そこも問題にはなると思います。

山口内科院長（志布志市）



【プロフィール】

鹿児島市出身で、鹿児島大学を卒業しました。医師を目指した理由の一つとして、学校に貼ってあった医療関係のポスターに書いてあったことを信じていたんですが、後に、それは間違っていたということがあり、そういうことであれば、自分が医者になろうと思ったことがありましたね。

大学卒業後、第二内科に入局し、いくつかの病院を回りました。専門は、腎臓内科です。

出身地とは関係ない志布志市で開業した理由は、土地の値段が鹿児島市と全然違っていたことです。平成8年1月にここで開業しました。

【経営方針、日頃の思い】

ここの地域で初めて透析施設を整備しました。腎炎や蛋白尿の治療に当たっています。経営方針は患者さんのためにを念頭に思っていますが、なかなか難しいですね。

ここの自慢と言うと、医療とは直接関係はないんですが、海の近くということで毎日天気さえ良ければ御来光が見えますよ。

地域住民とのふれあいという思い出としては、子どもの小学校の運動会で父親も走る競技があり、自分も走ったんですが、回りのお父さん方より少し年を取っていて、体重も少しだけ重たかったんですが、一生懸命走ったんです。そうしたら、観客席から「先生！」という応援の声が聞こえました。びっくりしたことを覚えていますよ。

【医師確保について】

子どもの教育ということは問題ですね。ここから鹿児島の学校に通わすことが出来ればいいですけどね。自分も子どもが3人いますが、2人は中学校から鹿児島で寮に入りました。

それと、人口が年々減少していることも厳しいですね。国の機関や会社の営業所等も鹿屋市などに統合されている。そういうことも影響しているかもしれませんが、地域が活性化されて元気になってこそ医師も来たがるんじゃないでしょうか。

【プライベート】

妻と子どもが3人で、子ども達は学生です。趣味はカラオケ、歌を歌うことですね。昔はGlee club合唱部に入っていたこともありましたよ。Lady Gaga等で英語の勉強。

歌が歌えることは、当たり前なのですが、健康のバロメーターでもありますね。病気になったらすごく歌いにくいし、死ぬ前の人にはたぶん歌えないでしょうから。

こちらで好きな場所と言うと、繰り返しになりますが、天気さえ良ければ御来光が見えることですね。

でも、医院を作った最初の頃、鹿児島市からの帰りには、日出る地＝最果ての地に帰るような気もしていましたね。大学に所属していれば、普通2年くらいで転勤になるわけですが、医院を作ったら逃げられないと気付きました。

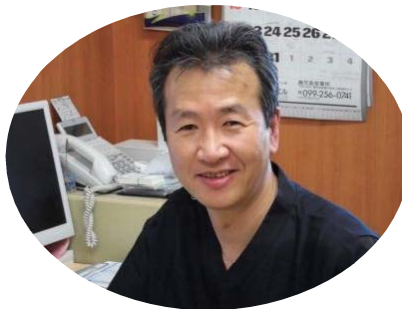
こちらの食べ物で印象に残っているのは伊勢エビですね。肉なんかも美味しいですが、これも運動会での思い出ですが、漁師さんの心意気というか、運動会の時に伊勢エビの刺身を食べていたことには驚きましたね。



志布志湾

山内 慎介

山内クリニック院長（肝付町）



【プロフィール】

出身は始良市蒲生町です。中高は鹿児島市内、大学は栃木県の自治医科大学（9期生）です。

卒後は、2年間の初期研修（鹿児島大学医学部附属病院）も含め10年間県職員として県内各地に赴任しました。初期研修のあと県立大島病院で1年間の実務研修を終え、最初のへき地勤務として十島村・三島村の診療に携わりました。鹿児島赤十字病院からの巡回診療という形で診療でした。

今は、だいぶ形は変わっているようですが、当時は、移動保健所などとも一緒になったりして、保健師さんたちとも楽しく仕事をさせてもらいました。宝島、小宝島、口之島、竹島などが担当で、一番遠い宝島までは村営船で15時間ぐらいかけて行っていました。夜10時に鹿児島港を出港、翌日昼に着いて午後から診療、一泊して午前中診療を行い、また15時間かけて帰ってくるということを毎月3年間やりました。卒後4～6年目くらいの時期に、そういうところで診療させてもらった経験が、いまの診療に役立っていると思っています。

卒後7年目には自治医科大学（呼吸器内科）に1年間研修に行かせてもらいました。研修から帰って来て、県立北薩病院を経て、再びへき地勤務として奄美大島の瀬戸内町へき地診療所で勤務しました。ここでも加計呂麻島、請島、与路島などの巡回診療を経験しました。最後は出水市立病院での勤務で義務年限を終了。その後は少し勉強しななおそうと思っていたのですが、亡くなった義父が開業していた高山で医院を再開しないかという話があり、これまでやってきた地域医療を引き続き実践できるのではと考え、平成8年に当地で開業、早いものでもう20年目になります。

専門は内科で、なかでも呼吸器に関心があって研修に行かせてもらいましたが、あまり大学でじっくり研究などをした経験はなく、地域回りが主だったので、

実地というか臨床中心でやってきました。

私が大学を卒業した頃は、今の初期臨床研修制度というものではなく、各医局に入局して専門研修をするという形が主流でした。そんな中、私たちは医師になって比較的早い時期にへき地診療に携わるということで、当時から初期研修は多科ローテーションという形で受けさせてもらいました。もう30年くらい前のことですが、私の場合は、内科、小児科、外科、産婦人科、耳鼻咽喉科などを2年間でローテート研修しましたが、専門的な難しいことはできないのですが、この経験が専門外の相談を受けたときの診療に役立っていると思っています。

小学校の卒業文集には「将来なりたい職業」に医師と書いていたようですが、本格的に医師になろうと決意したのは高3の進路を決める時でした。地域で働ける資格のある仕事がいいかなと思って決めました。地元の国立大学志望でしたが、一度は県外へ出てみたい気持ちもあり、ちょうどその頃、自治医大の1、2期生が地域の現場へ赴任し始めたという新聞記事を見て受験しました。

今は、内科をやっていますが、学生時代には外科をやりたいと思っていました。医師のイメージとして、切るのが医師だと。しかし、医学部でいろいろ勉強していく中で、まず幅広いのは内科だろうと思ったことと、もう一つは、外科はある程度の期間、大学病院等の施設で研修しないと技術を身につけられないということもあり、卒後早い段階で臨床の現場へ、しかも一人で勤務する機会が多くなることを考えて、ひとりでもやれるのは内科系かなと思い決めました。

内科でもいろんな専門科があります。今でこそ、鹿児島大学にも呼吸器内科教室ができましたが、卒後当時は鹿児島には呼吸器内科専門の医師は少ない状況でした。循環器、消化器の医師は多かったのですが、地域では呼吸器疾患の患者さんも多いので後期研修の機会に呼吸器内科を勉強しようと思い研修に行きました。呼吸器内科とい

うのは、開業してからもレントゲン、スパイロ等があればそれほど特殊な機器も必要なく、プライマリケア診療を行っていく上では良かったかなと思っています。

【日頃の思い】

地域で求められていることに対して一生懸命やろうというスタンスでやっています。あまり主体的ではないのですが、特に、これをやりたいとか、こんなふうにやりたいとかいうのではなく、自分の役割は何かをいつも意識してやってきました。10年間の勤務医の時もそうでしたが、診療所勤務だったら診療所で、病院勤務だったらその病院で与えられた役割というか、自分ができる役目を果たせればという感じでずっとやってきました。開業してからも同様で、職員に対しても、うちのクリニックが地域でどういうことを求められるかを意識して、出来ることを一生懸命やろうと話しています。

開業して20年目になりますが、現在地に移転するまでの最初の10年間は有床診療所をやっていました。外来と入院、そして特養の嘱託医まで、かなりハードで3人分くらい働いていたような感じでした。まだ若かったからやれたのだと思います。私が開業した当時は、小児科は鹿屋に2、3施設しかない状況でしたので、小児もよく診ていました。また、当直のスタッフがいたので、時間外や休日も在宅していれば対応していました。今では専門施設も増え、夜間急病センターも整備され助かっています。

この大隅地区でも医療連携体制の整備が進み、医療環境はずいぶん良くなってきていますが、まだ課題もあるように感じています。専門医がいても、外来診療のみしか対応していなかったり、非常勤であったり、また、医療施設の整備は十分であっても専門医不在など、連携上のネックになることがあります。入院治療などをお願いする二次医療機関探しに苦労することは今でも時にありますね。急性期医療、高度専門医療が集約して受けられる体制ができていけばいいと思っています。

【医師確保について】

今の若い医師とは直接話す機会はありませんが、私たちが医師になった頃と比較すると、初期研修の形も変わってきていて、早くから地域で研修する機会もあり、地域で働きたいという医師は

増えてきているのかなと思っています。

もちろん専門医志向はあると思いますが、今、議論されている総合診療医とかプライマリケアとかに、関心のある若い医師は結構いるのではないのでしょうか。そうであれば都市部で仕事をするより、こういう地方の方が遣り甲斐があるのではないかと思います。生活面ではいろいろ不便があるかもしれませんが、医師不足といわれ、困っているところ、足りないところで働くということとは、働き甲斐があるのではないのでしょうか。

大病院で研鑽を積んだり、技術を身につけたりする時期は当然必要でしょうが、医師として医療人として、医療に取り組む、特に地域医療に触れるという意味では、こういう地域で働く経験は役に立つのではないかと思います。

若い医師を受け入れるうえで大切なことは、やはりバックアップ体制だと思います。診療のサポートはもちろんですが、代診支援体制みたいなものが整ってくるといいと思います。ライフサイクルに合わせて地方でも働けるような環境作りが大切なのだろうと思っています。

町のゆるキャラ

「いて丸」と

ロケット発射場



【プライベート】

家内も内科医で、週の半分はクリニックの外来を一緒にしています。家内が資格を持っているおかげで、私が不在の時でも緊急時の対応などで助かっています。

子どもは、3人いますが、上の2人は中学から鹿児島市内へ進学し寮生活でした。長女は東京在住、次女はこちらにいて医療事務などを手伝ってくれています。一番下の長男はまだ学生です。

教育関係でいうと、今春（平成27年）わが肝付町に県立の中高一貫校である楠隼中・高校が開校します。中学校の1期生は半数くらいが県外からの子供たちと聞いています。難関大学進学を目指すというコンセプトもある学校ですので、是非、成功して欲しいと思っています。当院からすぐ近くでもあり、初年度は校医を務める予定です。

趣味は、なかなか上達しないゴルフです。最近ではコースへ行くとかえってストレスがたまることも多く、もっぱら「ゴルフの練習」が趣味になっています。アウトドアが好きで、時間があれば庭の芝の手入れをしたり、バラを育てたりして、ガーデニングを楽しんでいます。

私の住んでいる肝付町は歴史のある町で、良いものがたくさんあります。特に、高山の流鏝馬は有名です。毎年、10月の第3日曜日にあるおよそ900年前から続く伝統行事で、射手は地元の中学2年生から選出されて40日近く練習して本番に臨むのですが、幼少のころから診ていた子が一生懸命練習して馬に乗る姿は感動的で、ほぼ毎年見に行っています。

また内之浦には、小惑星探査機「はやぶさ」やイプシロンで有名なロケット発射場もあります。

【医師を目指す大隅の子ども達、全国の医師、医大生へ】

どんな仕事もそうですが、医療の仕事というのは、特に人と関わる仕事なので、地域で仕事をするのが本来の姿なのかなと思っています。

学生時代、そして医師になりたての頃は、病気に関心が向くのは当たり前ですが、そのために、よく「病気を診るのではなく、人を診る」と教えられてきました。今、地域で開業して仕事をしていると、「人だけではなく、地域も診る」ということを感じています。

医師としてのキャリアアップのためには、地域での医療に接することは大切なことだと思います。

ここ大隅は、過疎、医師不足など多くの問題を抱えている地域ではありますが、そういうところで一人でも立派な医師が育って行って、地域の人達が安心して暮らせるようになればいいと思っています。

今の若い医師たちには、学生時代を含め、早い時期から地域医療に接する機会がカリキュラムにも組み込まれており、また、研修医の時にも、地域医療研修があると思いますので、そういう機会を利用して大隅に来て、地域医療を体験してもらいたいですね。

医師として進むべき道には、基礎医学の研究や最先端医療の研究、高度な手術の修など、それぞれ自分の適正を考えて選んでいけばいいのですが、少しでも地域医療に関心がある方は、是非、大隅に来て頂ければと思っています。



高山やぶさめ祭

山本 絵奈

社会医療法人 鹿児島愛心会
大隅鹿屋病院 循環器内科



【医師を目指して】

私は島根県で生まれ、大卒で地元で生活しています。卒業後、5年間の勤務を経て、現在は...

幼少時から家族で医療系のドクターを目指して育ちました。高校3年生の時に、父の勧めで、大隅鹿屋病院の循環器内科で働くことになりました。

勤務する「大隅鹿屋病院」は、当院が「大隅鹿屋」の良き文化を築いてきたことに、大変感謝しています。勤務先が、地元を愛する方々の集まりであること、また、先輩医師から学ぶ機会が豊富にあることが、大変励みになります。

【医師としての思い】

現在の専門は循環器内科です。途中、休職を経て、今は循環器内科に復帰して働いています。当科には医師が4名で、対して循環器内科は1名です。若手医師が少なくなると、患者さんのために、私たち循環器内科医師は、日々の診療に励みます。

循環器内科は、命の岐路に立つ重要な診療科です。患者さんの命を守るために、日々努力しています。また、地域医療の発展にも貢献したいと思います。

断来療が時々の助けで、医師の研らめたい。患者さんとのコミュニケーションを大切にする。日々の診療は、患者さんのために、一生懸命に取り組んでいます。

【大隅での暮らし】

大隅の暮らしは、のんびりとした感じがあります。自然が豊かで、物産も豊かです。大隅の風土人情は、本当に素晴らしいです。毎日を穏やかに過ごしています。

【医師を目指す大隅の子どもへ】

医師を目指す子どもには、大隅の魅力を伝えてあげたいです。大隅の自然や文化は、子どもたちの心を豊かに育てると思います。

【全国の医学生や医師へ】

全国の医学生や医師へ、大隅の魅力を伝えてあげたいです。大隅の自然や文化は、患者さんの命を守るために、日々努力しています。



(吾平山稜)

よしとみクリニック院長（垂水市）



【プロフィール】

出身は福岡県です。住んでいたのは太宰府市です。今はもう誰も住んでいません。父が転勤族だったので、中学校までは九州内を転々としていました。大学は鹿大です。

医師になろうと思ったのは高校の頃です。その頃はあまり深くは考えていませんでしたが、やりがいがあるのかなと思って。人を治すってどういうことなのか、自分が怪我をしたときに治してくれる医師を見ていいなと思ひまして。外科系の医師がかっこよさそうな感じがしたというか、憧れもありました。

専門は泌尿器科です。ローテーションの際に医局の雰囲気良かったというのと、外科と内科と色々でき、守備範囲が広い科だということで進みました。腎臓から尿路系全部とあとは内分泌もあり、透析や血管手術も対象になります。

医学部を卒業後は、鹿大に入局し、川内市民病院、阿久根市民病院、大島病院など県内の病院も回りました。

開業のきっかけは、知り合いがいたことや垂水中央病院との繋がりがあったことです。

【日頃の思い（経営方針）】

地域医療というのはもちろんなんですけど、全てができるわけではありませんが、地域の身近な相談役としてのかかりつけ医になればと思っています。

垂水中央病院に勤めていたことはありますが、元々とこちらの出身ではないので、地域の方々との繋がりを作るのに色んなところに顔出しするようにしています。まずは知ってもらうことからです。

勤務医の時に県内の病院を回っていて、特に地域性の差を感じたことはなかったです。垂水市もすぐ目の前は鹿児島市ですし、都会的というか、そんなに何

も閉鎖的なものなどは感じないです。

今は鹿児島市内から通勤してしまして台風時期などは、進路を予測して泊まるようにしています。ここの診療所は1泊ぐらいはできるようになっています。

まだ開業したばかりで、私が完全な主治医という患者さんが少ないので、鹿児島市内から通勤することに問題はないんですけど、私自身がかかりつけ医で内科も全て診ているというような患者さんが増えてくれば、不都合もあるでしょうが今のところは検討中です。

【医師確保について】

やっぱり交通の便が重要ですよね。交通ルートがなさ過ぎますので、公共の乗合バスみたいなのがないと本当にいいんですけど。交通手段がなくて受診に出来ない方が多いので、どこの病院も送迎車とかで対応されていますよね。

御夫婦で御主人さんが免許を返してしまって2人共どうしようもなくなっているとか。いわゆる交通アクセスのせいで医療のフリーアクセス権がなくなっているところはありますよね。だから、車を持って来て連れて行くところに頼むしかないという、そういうところは不便だなと思いますよね。

広いところに高齢者が点在しているんですね。社会資源を回すには田舎でも町中に集中していないとなかなか難しいですよ。でもそうすると周りの里山がめちゃくちゃになるからどうなるのかという問題もあります。

また、医師だけでなく、色んな人が都会から帰ってくるのも必要かと思ひます。それにも働く場がないといけませんしね。

高齢者ばかりだと、高齢者対象の医師しかいられなくなるので、小児科とかが立ちゆかなくなる。やっぱりなかなか難しいですよ。

在宅医療への取り組みとして、当院でも

月に1～2回くらい寝たきりの方の膀胱瘻とか、そういうカテーテル交換とかの患者さんの何人かを担当させてもらって往診をしています。あとは緊急時は24時間電話が通じますので、呼んでもらえれば行くという形ですね。

【プライベート】

鹿児島市内に妻と子どもと5人で暮らしています。

趣味は魚釣りとかしていたのですが、今は全然行っていません。行くとしたら海釣り公園に行きます。アメニティーがしっかりしているので。一人で色々道具やら抱えて行かないです。呼び出しがあった時とか考えるとやっぱりアクセスがいいところになってしまいます。そういうふうに癖がついてしまいました。大学のときは色んなところに入り込んで行ったりとかしましたけど。こちらでは、勤務医の時には近くの港で釣りをしたこともありましたが、開業してからはまだ余裕がありません。

【大隅の魅力について】

垂水の道の駅がやっぱりいいんじゃないですかね。足湯があるところです。あそこは、桜島もロケーションがいいですし、通るときには休憩で寄ります。それから、千本イチョウとか高峠のツツジ、猿ヶ城とかですかね。降灰さえなければ色んな意味でいいところですよ。

鹿児島県自体が肉、魚何でもいいと思いますよ。新鮮ですよ。大隅半島もエビとか特産品がありますから。ここにいないと手に入らないものもあるので、そういうのはやっぱりいいところだなと思います。

【医師を目指す大隅の子ども達や全国の医大生、医師へ】

子ども達へは、今、医師は人気が高くレベルも高くなっていますが、やっぱりやりがいはあると思いますので、頑張ってください。

全国の医師や医大生へは、過疎地域にどうぞ目を向けて助勢いただきたいということでしょうか。



道の駅

「たるみず」



ひめあまえび



海の桜勘 (かんぱち)



かんぱち漬け丼定食